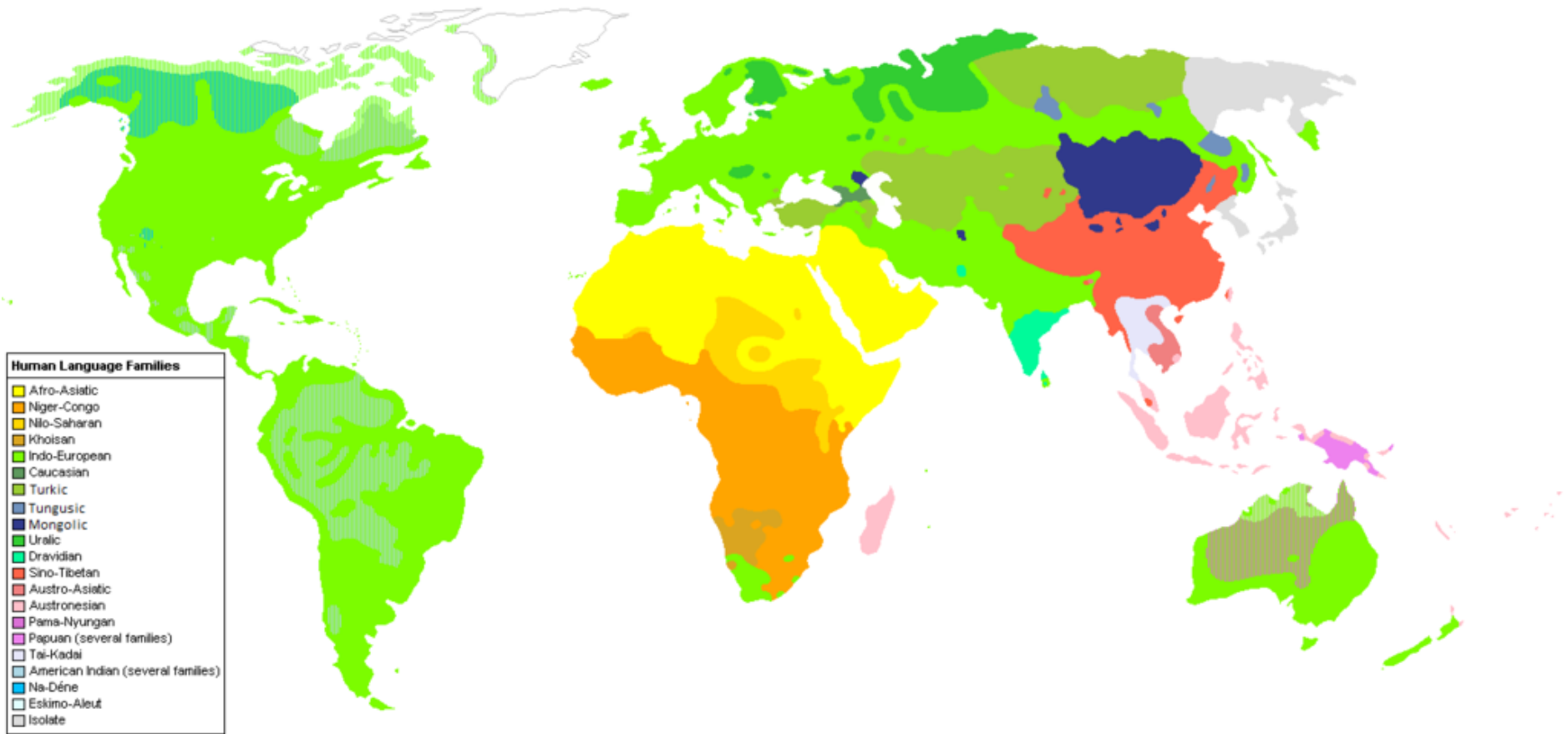


語族

世界の言語をカテゴリ分けする学術的な容器物の設定として、語族という分類を用いる。

世界の主要語族



<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AA%9E%E6%97%8F%E3%81%AE%E4%B8%80%E8%A6%A7>

比較的研究されている語族の一覧

- 1 インド・ヨーロッパ語族(印欧語族)
- 2 コーカサス諸語
- 3 アフロ・アジア語族
- 4 ニジェール・コンゴ語族
- 5 ナイル・サハラ語族
- 6 コイサン諸語
- 7 ウラル語族
- 8 アルタイ諸語
- 9 シナ・チベット語族
- 10 タイ・カダイ語族
- 11 モン・ミエン語族
- 12 オーストロアジア語族
- 13 ドラヴィダ語族
- 14 オーストロネシア語族

研究途上の諸語の一覧

- 1 バスク語
- 2 エトルリア語
- 3 シュメール語・エラム語
- 4 フルリ・ウラルトゥ語族
- 5 ブルシャスキー語
- 6 アンダマン諸語
- 7 朝鮮語族
- 8 日本語族
- 9 オーストラリア諸語
- 10 パプア諸語
- 11 古シベリア諸語
- 12 アメリカ先住民諸語

○言語文化が滅びる理由

およそ言語の減少に拍車をかけた事件で、ルネサンス期の**帝国主義**にかなうものはありませんが(今後も言語帝国主義によって英語以外の言語が滅びたり話者を減らしたりすると考えられます)、帝国主義は言語に限らない人類史全体に幅広い影響を持った事象であり、言語学的にはあまり面白味はありません。帝国主義を含め様々な事象による地球上の言語分布の偏りや減少への影響について、素人なりに考察してみます。

距離は関係ない

基本的には言語は地続きで広がります。だから大抵は地理的に限られたエリアで言語は流通します。日本語が他のどの言語とも似ていない(いちおうアルタイ語族に属しているとされるが、漢字文化の影響を取り除いた“やまとことば”のレベルで日本語が朝鮮語やモンゴル語とどのくらい似ているか、と言う問題には決着がついていない)のは、言うまでもなく日本が島国だからです。

その一方で、飛び地に類似の言語が分布するケースもあります。「**インド・ヨーロッパ語族**」と言う名称から分かる通り、インドの言語(ヒンドゥー語、ベンガル語など)とヨーロッパの言語は親戚関係にあるとされます。文字もまったく異なるし、空間的に両者の間には広大な**トゥルク語族**(トルコ語、カザフ語他、Wikipediaではアルタイ諸語に含)、**セム・ハム語族**(アラビア語他、Wikipediaではアフロ・アジア語族に含)などがあるにも関わらず、です。その一方で、フランスとスペインの間に、どちらの言語にもまったく似ていない**バスク語**が存在します。

もし海を隔てて類似の言語が存在していたら、おそらく当時は陸続きだったなんて仮説にもなりえます（もしくは当時すでに海を渡れるだけの船舶技術があったのかもしれない）。言語学はルーツを探ろうとすると考古学までさかのぼることになります。ネアンデルタール人は壁画と言う形で文明を持っていたことを示しましたが、果たして言語は持っていたのだろうか、、、。

農耕文化が言語を滅ぼした

これも言ってみれば帝国主義と同様です。農耕文化は、土地を極めて有用な財産に変える。そうすると部族間での土地の奪い合いが始まります。領土拡張戦争の始まりです。農耕が始まらなかったら、部族や豪族などの集団形成はあり得ませんでした。狩猟民族も、もちろん狩が1人でできる訳ではありませんが、移動を繰り返すため、大集団とはなりにくい傾向があります。

農耕は穀物など保管の効く食料を生産し、食べ物の“所有”を実現し、そして土地の“所有”をもたらしました。つまり経済の始まりでもありました。同時に、小さな言語が大きな言語に食われることの始まりでもありました。

戦争や侵略による言語の増加

戦争による占領行為は、言語の消滅を引き起こす一方、負けた側の言語も粘りを見せるとクレオールと言うミクスチャー言語が生まれる。2つの言語のミクスチャーの中途段階の**ピジン言語***pidgin language*はある意味片言の言葉であって未完成だが、その二世が話す**クレオール言語***creole language*は話者にとって母語であり、それはすなわち立派に新しい言語である。

代表的なクレオール言語

- 英語系のクレオール語：ハワイアンピジン、小笠原語
- フランス語系のクレオール語：セーシェルクレオール語、ハイチクレオール語、モーリシャスクレオール語
- ポルトガル語系のクレオール語：ギニアビサウ、マカオ語

○少数言語のある地域と暮らし

少数言語のある地域と暮らし

シベリアの言語にスポットを当てる上で、先ず少数民族について考察します。

少数民族は、現代社会では残念ながら文明度の低い民族に位置づけられてしまいます。人数のパイが少ないのですから当然ですが、そこにこそ人類の多様性があります。人類の多様性の面白さについてはクロード・レヴィ・ストロースの「悲しき熱帯」のような名著を読むと良いでしょう。

少数民族は今日で言う交通の便の悪いところで暮らしています。都会化されると他の民族との混合で、民族そのものが区別不可能になって消滅します。少数言語も同様のことが起こります。もちろん、近代化前は戦争によって滅ぼされた民族、そして言語がたくさんありました。

少数民族をたくさん有する東南アジア、南米、アフリカ、そしてシベリア。東南アジアは近年の急速な開発で都市化していますが、それ以前の帝国主義時代に民族固有の文化が大幅に滅ぼされました。先ほど述べたようにヴェトナム文字(チュナム)が消えたのも、フランス統治下にあった時代に強制的にローマ字表記(クオック・グー)に切り替えられました。また、海で隔てられた島国も少数言語の宝庫です(パプア・ニューギニアなどは語族だけで数十あり、言語数は800と言われる！)。

アメリカ先住民諸語

北米はアングロサクソン系を中心とした白人人種によって栄えている一方で、西部開拓時代に数多くの先住民民族が滅ぼされ、現在も同課によって民族、言語が消滅しつつあります。

南米は現在も深いアマゾン森林に守られ、現代文明と接触していない民族も多数あるようですが、とにかく研究が進んでいないのが現状です。

コイサン諸語

アフリカ大陸、最も言語の多様性がある大陸と言われています。現存する世界の言語約6000のうち2000はアフリカ大陸の言語です。この大陸は、自然が豊かな一方、ライオンやチータなどの獰猛な野生動物も多く、人びとは移動を余儀なくされ、近現代においても帝国主義の犠牲になり、近代化が遅れました。だからこそ、これほど多様な言語文化を残していると言えます。

古シベリア諸語

シベリアもまた、交通の便が悪いだけでなく、厳しい自然環境にさらされています。氷点下40度、50度と言う厳しい環境は生活するには大変ですが、外敵に襲われる心配が少なく、独自の文化を維持しやすい環境と言えます。

○シベリア言語について

シベリア言語について

シベリアに住む人びとは人種的には主流はモンゴロイドになります。つまり民族的には日本人と極めて近い人びとで、ロシア人のようなコーカソイド（白人）は一部の移民に過ぎません（ロシアは国土が広大なので、国内でありながら移住、移民と言う表現がピッタリきます）。

沿岸部で漁猟を営みながら暮らしているのはエスキモー族（主にイヌイット族、アイヌ民族に近い）ですが、移動するので分布範囲が広く、個人的には内陸の孤立した民族が謎で大変興味があります。

古シベリア諸語

Paleosiberian languages

- チュクチ・カムチャツカ語族
- ユカギール語族
- ニヴフ語
- デネ・エニセイ語族

チュクチ・カムチャツカ語族でも数千人、他の語族は数百人、数十人しか話者が残っていない。いずれも他の語族との関連性が不明で、言語としての希少性も高い。

エスキモー・アレウト語族(参考)

- 現在のシベリア一帯で最も勢力のある語族はエスキモー・アレウト語族です。しかし、エスキモー・アレウト語族は本来アメリカ大陸の先住民の語族です。つまり、アラスカ半島からアジアへと渡ってきたエスキモーほかの民族が広めた言語です。
- アメリカ北部からロシア極東部まで広く話されていましたが、今日ではロシア語化されて消滅の危機にあります。

デネ・エニセイ語族

エニセイ語族は他のシベリア諸言語と大きく異なる。そのため孤立語族と考えられていたが、アメリカ先住民のナ・デネ語族との関連性が指摘され、2008年に**エドワード・ヴァイダ**が両者を包括するデネ・エニセイ語族を提唱。

ケツト語

- デネ・エニセイ語族に属する、と唱える学者もいるが、多くの学者は語族不明と考えている。
。
- 1980年代にキリル文字への転写が行われている。
- **能格言語**(後述)、声調言語
- 話者：600人弱

ケット民族

先ほど、シベリアはモンゴロイドが多い、と説明しましたが、エニセイ諸族の末裔(他の民族はほとんど消滅)であるケット民族は、**アメリカ先住民**にきわめて近い人種であり(都市伝説的に、ケット民族を日本人の祖先ではないか、と仮説する人もいるようだ)、また、ケット語も古シベリア諸語の中で孤立した特徴があり、アメリカ先住民のナ・デネ語族に似た特徴があることから、現在ではデネ・エニセイ語族と言う語族カテゴリが主張され、ケット語はその語族に含まれるとされている。

ケツト民族

<http://lingsib.iea.ras.ru/en/languages/ket.shtml> より引用



Tyganova (Baldina), Nina
Kharlampievna (born in 1928)



Dorozhkin, Aleksandr
Vladimirivich (born in 1958)

能格言語 Ergative Languages

エスキモー語は学生時代に少しかじりましたが、それがシベリア言語との最初の出会であり、また「能格言語」との最初の出会でもあります。そして、私が一番関心を寄せているデネ・エニセイ語族のケツ語もまた、能格言語です。

もっとも有名な能格言語は、フランスとスペインに挟まれたバスク族が話す**バスク語**でしょう。また、ヒマラヤ山脈と言う高地言語として代表的な**チベット語**も能格言語です。

先ず能格言語を説明する前に「格」とは何か、を簡単に説明します。簡単に言えば、文の中での(統語論的な)構成要素の「役割」です(主語、述語など)。チャールズ・フィルモアの「格文法」が有名です。格は格変化活用として表現されたり、助詞などの補足語で表されます。昔は格変化活用の多い言語(ロシア語も6格ありますが、フィンランド語は29格あります。まあ英語も格変化は代名詞以外ありませんが、構文上5種類の格を認識しています)が好きでしたが、能格言語はその格の位置づけ方そのものが他の言語と異なる、と言う点で衝撃を受けました。

つまり、一般的な言語は主格を中心にした格の考え方をしますが、能格言語は目的補語＝対格を中心にした考え方をします。

ここで疑問なのは、英文法で考えると、述語の中心である動詞には他動詞、自動詞があり、自動詞には目的補語＝対格はないはず、と言う考えです。自動詞の場合は、主語が他動詞の対格と同じ扱いになります。つまり、他動詞の目的補語、自動詞の主語が「能格」扱いになり、他動詞の主語だけが「絶対格」と言う格に分類されるのです。

唐突なまとめ(笑)

- 国語が他の教科のベースにあるように、言語学は隣接学問に大きな知見を与える学問分野である。
- 世界には6000以上の言語があり、その大半が絶滅寸前の少数言語である。
- 特に能格言語はほとんどが滅亡危機言語であり、積極的な保護対策が必要である。
- 文明化されていない民族の少数言語にこそ人類の言語文化の豊饒さがあり、その絶滅を防がなければならない。

END